

鉄と虎.....

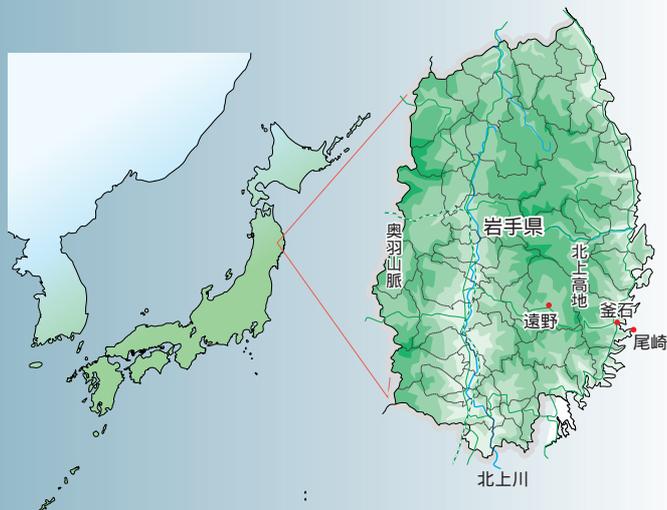
日本の「宝島」岩手・釜石を行く

その2

寄稿 POSCO人材開発院教授 **李寧熙**さん

イ ヨンヒ

前号に引き続き、今号も李寧熙さんの「韓国と日本の鉄の古代交流史」を探る旅の続きを紹介する。岩手の地図を熱心に眺めながら、その地名と地形から古代を手繰り寄せていく李先生の世界をお楽しみください。



釜石商業高等学校の虎舞



釜石の虎舞は どうして始まったのか？

一体、虎舞はどうして始まったのか。ここで私見を述べることにしよう。

正倉院の南倉には虎をかたどった、楽舞用のかぶりものが保管されている。正倉院展（2005年10月開催）に出陳された布虎兜二口と、虎の尾型の紐がそれである。

「虎をかたどった、楽舞用のかぶりものと虎の尾型の紐が、どのような演目に用いられたかは定かでないが、当時の楽舞装束のデザインを知る上で貴重な存在」と展示会図録発行者の奈良国立博物館側は述べている。

「当時」とは、東大寺の大仏像が完成、開眼供養された752年（天平勝宝四年）前後の奈良時代を指す。

八世紀の宮廷もしくは東大寺で開かれた、祭儀または法要の余興として演じられた楽舞の中に、虎舞があったことになる。大仏開眼前後の奈良時代を続けた天皇は、聖武とその娘孝謙・称徳（重祚）、いわゆる「八っこ」こと滅系の天皇である。従って、この時期に滅人のトートム虎を崇める祭祀があったであろうことは想像にかたくない。

麻布の表に虎の斑を墨描し、紙を芯として裏側には緋紵（紵）が張られ、前面縁に共裂の紐がついている。墨線で毛描された尾には、真綿の芯が入っているという。一口の幅28cm、尾長29.5cm、もう一口の方の幅は25cmだが、尾長は83cmと相当長い。

この布兜を頭巾のようにかぶって紐で結び、尾をつけ、一枚の大きな虎縞模様の布をかぶった二人一組の舞人



とぼつ びしゃもんてんりゅうぞう
花巻市東和町成島毘沙門堂「兜跋毘沙門天立像」レプリカ
(岩手県立博物館)



岩手県立博物館上席専門学芸員の赤沼英男氏の説明

が、釜石などにおける現在の虎舞さながらに踊ったのではない。

韓半島から先端技術を携え、日本列島にやって来た滅たちの、元気旺盛な姿を表現したのが「遊び虎」、また、非滅系つまり狼の新征服者によるその後の「滅退治」は、獵師による「虎狩り」こと「跳ね虎」演目に象徴され、「笹ばみ」のくだりが、製鉄と共にしぶとく生き延びてきた虎を表していると考えられる。「笹」は砂鉄を表象する。大阪今宮戎神社の十日戎などに代表される「恵比寿講(商売繁盛を祝ってえびすを祭ること)」における福娘の唱和「笹持って来い！」の「ささ」も、砂鉄を指している。鉄は幸の象徴だった。

虎舞は、製鉄と共に生き延びた滅人のパワーを表す踊り

岩手県立博物館正面玄関のロビー中央に「兜跋毘沙門天立像」がそびえている。これはレプリカで、実物は花巻市東和町成島毘沙門堂(北上川の支流、猿ヶ石川をさかのぼった山の中腹にある神仏混淆の寺)に安置されている平安中期の像。

毘沙門天は、北方世界を守護し、財宝を守るとされている神だが、この成島毘沙門天は、東北地方を平定した平安初期の武人、坂上田村麻呂を象徴しているという。

しかし、国内最大高さ4.73mの巨大な木像のポイントは、田村麻呂こと毘沙門天ではなく、毘沙門天を両手で支えている地天(大地を司る神・地天女とも)にある。目を閉じて固く口を結び、激しい怒りと悲しみを頑丈な体に

押し込んでいるような沈重さ。征討された蝦夷を表現したものであろう。

虎舞は、製鉄と共に、強靱に生き延びてきた滅人のパワーを表す踊り。同時に、虐げられて来た者たちの悲しい怒りの表現でもある。虎舞は、鎌倉・江戸時代に生まれた伝統芸能ではない。奈良時代、いやおそらくそれ以前から伝えられてきた、古い神事であったと見なされる。

虎舞が古くからの神事であった事を証す祭礼が、今も釜石に残されている。

釜石湾(古名・矢ノ浦・矢野浦とも)を包む尾崎半島の先端青出(あおだし)に尾崎神社奥の院がある。

祭礼は例年3月。神輿が白浜の本宮から青出に渡ることから始まる。9月29日(現在は10月の第3日曜日・山神社と合同の釜石祭り)には、曳船数十艘が渡り、三日三晩の祭礼の後、白浜の本宮へ帰還する。「曳船」と呼ばれるこの湾内の渡御で、船上では虎舞がにぎやかに奉納され、威儀を極めるといふ。

「三日三晩」は、一回のたたら製鉄作業にかかる時間をあらわす。従って「三日三晩」といえば、通常鉄作りの代名詞ともされてきた。かつて青出で製鉄が行われていたのではない。

日本にやって来た滅人は「や」と呼ばれ「八・夜・矢」などの漢字で表記されたことは前述した。釜石湾の古名「矢ノ浦」も、「滅の浦」の意で名付けられたものかも知れない。

岩手県立博物館上席専門学芸員の赤沼英男博士は、県内から出土する古代鉄器の中に、大陸や韓半島の磁鉄鉱で作られたと見なされるものがあるという興味深い情報を伝えて下さった。



釜石市立鉄の歴史館
説明者は浦山文男館長



釜石市立鉄の歴史館 餅鉄



花巻博物館にて（説明は副主幹兼主任専門学芸調査員堺宗孝氏）

「釜石」は古代韓国語「ガマウッシ」 「黒い上質の鉄」つまり「餅鉄」

渡人が蝦夷となって三陸地方に住み着いた痕跡は、周辺の地名からも追求できる。

まず、「釜石」とはどういう意味なのか検証して見よう。従来の語源説から紹介する。

かまいしという地名は、「魚を干す場所」の意のアイヌ語クマウシに由来する（『コンサイス日本地名事典』三省堂・『日本地名ルーツ辞典』東京堂）という。

だが、「魚を干さない漁港」などあるものだろうか。クマウシ カマウシが「魚を干す場所」の意だとすると、日本中の漁港は、すべてクマウシかカマウシ、カマイシでなければならないことになる。クマウシが本当に「魚を干す場所」の意のアイヌ語なのかどうかも疑わしい。

釜石市を通過して釜石湾に注ぐ甲子川べりに、かつてアイヌ語でカマウシと呼ばれた黒い大石があり、1970年と1978年の大洪水で土砂に埋没したという。釜石市発行史跡マップの説明には「大岩カマウシ埋没場所・釜石の地名の由来である、アイヌ語のカマウシという名の黒い大石があった付近」とある。

アイヌ語カマウシは「魚を干す場所」なのか、それとも「大岩」のことなのか。語義不明の地名は、すべてアイヌ語として片づけられている。

カマウシは、古代韓国語である。

ガマは「黒（黒い）」「釜」などの意。ウッシは「上質

（ウ）の鉄（シ）」を指す。

ガマウッシつまり「黒い上質の鉄」とは餅鉄のことであろう。この古代韓国語が「かまいし」と転音、「釜石」という日本式訓よみによる漢字にあてはめて表記されるようになったと見做される。

餅鉄は、幕末の安政時代（1850～1854）橋野鉦山（磁鉄鉦山）の籠を洗って流れる橋野川中流、金沢あたりでふんだんに採れたそう。橋野川は、釜石湾の北、大槌湾に入るが、釜石湾に流入する甲子川でも、餅鉄は採れていた。黒い大石のガマウッシがこのことを証明し、川の名「かっし」がこれを裏付ける。

かっしとはガッシ、つまりガ（磨ぐ・製鉄する・鍛冶をする）シ（鉄）のこと。サ・シ・ス・セ・ソはすべて鉄を表す古代韓国語である。

岩手の地名は鉄まみれ

柳田国男の『遠野物語』で日本民俗学のメッカといわれる遠野、このトオノもアイヌ語にされている。

トはアイヌ語で「沼」「湖」。ノはアイヌ語ヌプで「野」または「丘原」のことだという。

だが、ヌプ（nup）は、韓国語で「沼」を指称する。現代語であり、古語でもある。トはトラ（teo）、つまり「所」「地」の意。完全に逆に捉えてきたことになる。

要するにトヌプなる言葉は、アイヌ語ではなく「沼地」という意味の古代語であり、現代語でもある純韓国語なのだ。



岩手県立釜石商業高等学校虎舞の皆さんと記念撮影



釜石市内で行われた講演会



釜石製鉄所における工場視察

釜石製鉄所楽山荘で中村明海所長と

遠野は大昔、一円の湖だったと言われている。この湖沼の水が、周辺の山や崖の陥没によって猿ヶ石川に流入、干上がって陸地になったというのである。

この猿ヶ石川は、早池峰山南麓を水源とし、遠野から西に流れて、花巻市で北上川に合流している。上流に、猿が子を背負った形をした岩があるので、猿ヶ石川と呼ばれるようになったと言われているが、「猿」は「サ(鉄)アル(粒)」つまり砂鉄のあて字で、「ヶ」は前出ガ(磨ぐ・製鉄鍛冶)を指す。「石」は「続け(続ける)」の意のイシのあて字。サルガイシとは「砂鉄製鉄及び鍛冶場続き」を意味する川名なのである。川岸に延々とたたたらが続いていたのか。

岩手県内には「猿・申・去」などの当て字をした地名が多く、これらの地形を見ると「崖崩れの所」や「浸食された場所」などが多い(『東北の地名・岩手』本の森刊)という。いみじくも風化した花崗岩から砂鉄をごっそり採取する、天然の鉄穴流しの場が、これらの地なのである。

また、遠野の上郷には佐比内がある。サ(鉄)ピ(刀)ナイ(川・または「生み」)の意の古代韓国語。鉄刀作りの川べりの里だったのだろう。

岩手の地名はまさに鉄まみれだった。これらの地名が、古代韓国語で解明できると言うことは、その言葉を持った人々がこの地に来た事実を意味するものではないか。これまでたびたび「釜石が私をしきりに呼んでいる」と感じるがあったが、その理由が分かったように思えた。

文武四年(700年)6月、「東辺北辺の鉄冶を置くことを禁ず」なる特命が布かれる(「大宝律令」)。中央政府が法律で禁じねばならぬ程、東北の製鉄鍛冶は脅威的であったことになる。

圧迫や挫折を乗り越え、栄光を勝ち取ってきた鉄の国東北。中でも釜石市は今、その伝統を担う。釜石は日本における近代製鉄発祥の地でもあり、来年はその150周年を迎える。第二次世界大戦中、製鉄所は艦砲射撃で壊滅的被害を受けたが、戦後、再出発。しかし、1989年に高炉休止以降は、線材圧延に特化している。

ところで、この線材がまたすばらしい。新日鉄君津製鉄所(千葉県)で作られた鋼片を加工、ピアノ線や送電線、ネットフェンス・パチンコ玉・ホチキスの針から光ファイバーケーブル・溶接用マイクロワイヤなどなど...。そして、スチールラジアルタイヤに使われるスチールコード用線材に至っては、日本国内はじめ世界のトップメーカーだそう。

世界中で生産されているスチールコードの多くが、釜石製鉄所から送り出されているというのだから驚かざるを得ない。今やスチールラジアルタイヤはタイヤの代名詞。釜石製鉄所が、その膨大な世界需要を担っている。

今回の取材・講演にあたり便宜を図って下さった中村明海釜石製鉄所所長はじめ、新日本製鉄の皆さま方、および温かくお迎え下さった釜石市の皆さま方に、心から御礼申し上げます。カムサハムニダ(ありがとうございました)!